

中国における村上春樹文学のブームについて

蒋 京 蓉*・陳 月 吾**

An Upsurge of Literary about Haruki Murakami in China

Jingrong Jiang and Yuewu Chen

Haruki Murakami made his first appearance in the Japanese literary world in the 1970s, a great number of readers all over the world love his works. In Japan, Haruki Murakami's homeland, his works attract many readers for *sympathy from the heart*, he also touch the heart with literary keynote and language style. In his works, there are three basic themes, they are loneliness, void and having no choice, the heroes are much typical and each of them represents some era. All of these reveal the contemporary Japanese inner world clearly and reflect one important side of the Japanese society. Now Haruki Murakami's works have set off an upsurge of reading in China.

Key Words : Haruki Murakami, an upsurge of literary, in China

はじめに

この三十年間の日本文壇、新しい作家が絶えず勢いよく現れ、各文学賞の受賞者もますます年齢の若さの成り行きである。しかし、より長い時間に、より強い存続力を持ち、作品が幅広く喜んで受け入れられる作家は別に多くもなかったようである。その中で、当代の日本文壇で立派

* 教養部 ** 中国湖南中南大学

な風貌を展示された人物は当然村上春樹と言えるだろう。村上春樹の数多くの作品はすでに中国語に訳され、中国でたくさんの読者を持っている。その作品の発売量はもはや1,500万冊という出版界の天文学の数字を超えた。中国で、『ノルウェイの森』は2001年2月に上海訳文出版社により出版されてからの半年の短い間にくりかえして4刷印刷され、いままでもう二十回ぐらい印刷されたのである。^{注1}

一、言葉の特徴と文学の基調

村上春樹の作品はスタイルと言葉の上で独特だ。若者用語、流行語、外来語がおびただしく使われたために、作品はさらに日本の若者たちの世界に近寄っている。

村上春樹の作品の中で表れた比喻は特に注目されている。あまりよく似ていないのに、ある程度で確かに似ているのだ。たとえば：

- 1) 我々は遊星のように自然に引き合うのだ。 (『ダンス・ダンス・ダンス』 P24)
- 2) 沈黙はひどく重く、まるで深い深い穴の底にいるような気がした。 (『ダンス・ダンス・ダンス』 P149)
- 3) 彼はずっと耳たぶを指でいじっていた。それはまるで新札の束を数えているみたいに見えた。 (『ダンス・ダンス・ダンス』 P334)
- 4) 彼は～屋上から飛び下りて蛙のようにペチャンコになってしんだ。 (『風の歌を聴け』 P196)
- 5) カクテル・グラスのようにひんやりとした小さな手～ (『風の歌を聴け』 P100)
- 6) 彼女は疑り深そうに肯いてから立ち上がってレコード棚まで大股で歩き、よく訓練された犬のようにレコードを抱えて帰ってきた。 (『風の歌を聴け』 P77)

我々と遊星、沈黙と穴の底、耳たぶと新札、彼と蛙、カクテル・グラスと手、彼女と犬、これらのペアがほとんど似通ったところもないのに、村上春樹はものの互いの相違点を通じて、その共通点を巧みに探す。この上手な比喻を使うことによって、われわれにはいささかの無理も察知させなかった。かえって、その意を悟って思わず笑い出すこともある。

村上春樹の小説を読んでから、たまに自分も知らず知らずその比喻をしゃべるようになった人も少なくないようである。このような言葉の使

い方はたいへん中国の人々特に若者たちに喜ばれているからであろう。

村上春樹は幼いときのゆかりで、日本の伝統的な文化とのつながりがありあまり深くはないようであるにもかかわらず、彼はアメリカの作家 Scott Fitzgerald, Raymond Carver, Truman Capote, Tim O'Brien, Paul Theroux, Stephen King, Raymond Chandler, John Irving, J.D. Salinger, Kurt Vonnegut, Richard Brautigan, Gay Talese などをあがめ尊び、彼らの数多くの作品を訳し、精髓を奥深く得た。村上春樹は彼らに「小説は人生である」ということを学んできた。それに、村上春樹は音楽についての感悟をすらすらと生かし、音楽家のような特有の感覚で、豊富多彩であり不思議な世界を構築し、小説の雰囲気巧みに合わせている。

前世紀の70年代から80年代の末にかけて、日本は「後工業社会」に移行し始まった。世間には欲望がはびこっていて、いろいろな社会問題があって、様々な悩みを持つ人が多くなった。それによって、人文精神の紛失が誘発されたので、人間の価値観と人文精神はあらためて定めなければならなかった。村上春樹はこんな特定の歴史時期の人たちの感情生活に強く心を引かれ、密接に関心をもっていた。小説の中で、特有のレトリックにより、作品の感情、人物、ロジックを支えている。青春、遊びという雰囲気に満ち溢れているので、重い主題を楽にさせ、生きている息吹がみなぎっている。

そういうわけだから、村上春樹の書いた作品は当時の行き先がはっきりせず困惑している文壇に、新しく思いがけない驚きと喜びを与えた。甚だしきに至っては、ノーベル賞文学受賞者の大江健三郎も村上春樹の偶像としての魅力を撫で、褒め称えたことがある。

二、孤独と空虚

「孤独」と「空虚」が村上春樹文学の重要な精神思想である。

村上春樹は若いころ早稲田大学で演劇を学んでいた。当時、日本の学生運動の失敗は青年たちに一生磨滅しかねる挫折感をもたらした。その学生運動に参加した村上春樹ももちろん逃げることはできなかった。意気の上がる政治情熱はついに孤独、空虚、失意、茫然に変わってしまった。彼はジャズ・バーを営むと同時に、毎晩食卓に向かって創作を試してみた。気楽、さっぱりした文字、及び伝統と違った最も新しい文章のスタイルの間に、心の中で沈積している「黒く、重い虚無」を表われそうと試みた。

村上春樹が小説のなかに閉鎖している個人の孤独、空虚を繰り返し繰り返し描写し、かっきりと日本の数多くの都市青年たちの困惑の暮らし

向きをまことに反映している。そこで、小説の中の情景が読者の心の景況と驚くほど重なり、日本の男女青年が村上春樹の作品をある担体として、つまりそれによって共鳴し、心の中の情感を吐き出すことができる理想的な担体である。これもおそらく村上春樹の作品が日本で人気のある原因だろう。

村上春樹の孤独は実はある意味では自我に対しての認定、或いは自我保全、自我経営、自我完善であると言っても言い過ぎない。彼は都市への感受性を強く持ち、それに時代の特質とリズムをじゅうぶん把握することに堪能な作家であるとも言える。

村上春樹の小説は新しい世紀の中国において前例のないように一躍して人気をよんできた。大学のキャンパスやインターネットなどで、村上春樹及び彼の小説は人気があり、話題になっている。今日の中国では経済の高速発展によって日本の嘗ての社会問題も出てきて、人々が多元的な価値観を持ち、日に日に激しくなる競争と重圧を感じている。しかし、村上春樹の小説を読んでいる間、われわれは確実に字句の間からあの孤独、空虚、紛失、茫然などを感じている。それが中国の読者特に若者の共感を呼んで大変人気になったのであろう。

「村上春樹の作品はわたしにとってもう一つの非常に不思議なところがあります。それは一回読んでから、絶対にもう一回読む衝動があるということです。その感じはとても深い井戸から声をあげて叫ぶように、あんまり見えないけど、とっても確実です」と、ある若者がそう言った。

注2

「村上春樹は栄養剤じゃなくて、ただ浅い麻酔薬にすぎない」がもう一人の女子の大学生の話だった。注3

したがって、さらに正確に言えば、村上春樹の小説の中のこの情緒は、学生と若者を主体としている読者の閲読の需要をちょうど満足しているところだ。これも村上春樹の文学が中国での若者読者の中で人気をよぶ主な原因かもしれない。

三、時代色あり、典型的な主人公

村上春樹の小説の中の主人公は男女にかかわらず、それぞれに時代色あり、典型的な特徴をもっている。

『風の歌を聴け』、『1973年のピンボール』、『羊をめぐる冒険』によって構成した三部作が都市の時代の特殊な情調を持っている前衛文学であり、主人公の「僕」が『ダンス・ダンス・ダンス』の「僕」と原則的には同一人物である。主人公の「僕」はあだ名の「鼠」、小指のない女の子な

どの小説に登場された人物とみんな孤独であり、前途に対して茫然として分からない。彼らは若いときに自由に随意的な愛情と出会え、新しい考えを持ち、それに大胆に愛情を追い求める。

小説の女主人公は、大体独立な個性と人格があり、男の人に付き従わなく、たとえ男にぞっこん惚れ込んでも、落ち着いて、恋人と適当な距離を保つ。旧来の風習と伝統を重んじ、また保守している日本では、このような女性の形象は疑いなく、きっと知識女性の心の中に追求されているにちがいない。若い知識女性が村上春樹の作品の読者に63%という高い比率を占めているのはそういうことをはっきりと証明した。

中国は長年の封建社会なので、昔から女性の地位は内外とも一番低かったのである。女性は「娘として父親に従い、嫁として夫に従い、未亡人として息子に従え。」^{注4}と言われる「三従」に束縛されて、人間としての個性や感覚がすべて奪われてしまった。新中国が成立されてから、女性の地位がすっかり変わったが封建社会の影響は幾らか残存されているので、社会全体からいえば伝統的、保守的であった。改革開放とともに外国の文化や観念などが少しずつ人々に影響されているのである。村上春樹の作品の主人公の独立な個性と人格が中国の若者、特に知識女性たちに喜ばれているのである。

おわりに

今日、村上春樹はただ一つの文学のスタイルだけでなく、さらに完全に一つの生活のスタイル、一つの思考のスタイルと認められているが、甚だしきに至ってはある種の時代の流行のシンボルといっても過言ではないと思う。日本と中国の両国の間の関係が時には行き詰まった時期もあるが、政治体制と文化が違うことなので、避けられないかもしれない。しかし、素晴らしさと優しさを追い求める方面においては、日本人にしても、中国人にしても、ひいては他の国の人にしても、皆同じ感覚を持っているのではないだろうか。中国において巻き起こった村上春樹のブームは、ほんの少しも不思議に感ずることはないと思われる。村上春樹のような優れた作家は当世にまれに見るわけだ。全世界の「村上春樹のマニア」の心の中で、村上春樹はいつまでも春の緑樹のように清らかで新しいと思われている。

注釈

- 注1 この部分の数字は2004年に上海訳文出版社から出版された『挪威的森林』による。
- 注2、注3 この二つの部分は中国の若者達の話より、自分で日本語に訳したのだ。
- 注4 「未嫁从父，既嫁从夫，夫死从子」中国『儀礼、喪服—子夏传』。
筆者訳

参考文献

- 『ノルウェイの森』 上 下 / 村上春樹著. 講談社, (1987)
- 《挪威的森林》 / 村上春樹著. 林少華译. 上海译文出版社, (2004)
- 『風の歌を聴け』 / 村上春樹著. 講談社, (1979)
- 『1973年のピンボール』 / 村上春樹著. 講談社, (1980)
- 『羊をめぐる冒険』 / 村上春樹著. 講談社, (1982)
- 『ダンス・ダンス・ダンス』 上 下 / 村上春樹著. 講談社, (1988)
- 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 上 下 / 村上春樹著. 新潮社, (1988)
- 『カンガルー日和』 / 村上春樹著. 平凡社, (1983)
- 『回転木場のデッド・ヒート』 / 村上春樹著. 講談社, (1985)
- 『パン屋再襲撃』 / 村上春樹著. 文藝春秋社, (1986)
- 『国境の南、太陽の西』 / 村上春樹著. 講談社, (1992)
- 『海辺のカフカ』 上 下 / 村上春樹著. 新潮社, (2005)

(平成19年3月22日受理)